

胃潰瘍の治癒判定とステージ分類に関しては、昨年の春と秋の日本消化器内視鏡学会のパネル討論のテーマとして取り上げられ、多数の演者によって論じられた問題であるが、今回更にその集大成とも言うべき形で、本誌の特集号としてまとめられたわけである。

病理組織学的な潰瘍の修復度分類としては、古くから村上の分類があり、一方、胃潰瘍の内視鏡的ステージ分類としては、崎田・三輪分類が広く利用されている。最近の内視鏡検査技術の発達はいくらの問題を新しい角度から見直すことを可能にした。

従来から内視鏡では小さな組織欠損を覆う白苔と、外因性の粘液、瘢痕中心部の褪色とをかなり明確に区別してきたが、色素を利用することにより、更に細かい区別が可能になった。また、拡大観察により、再生上皮の微小形態の差から、組織修復段階をより細かく推論できるようになったことは技術的進歩であろう。更に、A₂-stageは病態生理学的に既に治癒過程に入るという指摘も興味深い。しかし結論的には、白苔消失を1つの臨床的治癒の指標とし、更に組織学的修復の完成まで、薬物療法を続けるべきであるという認識に変わりはないようである。重要なことは、潰瘍のステージ分類の定義を明確にし、個々の潰瘍ないし瘢痕の内視鏡像から、誰が見ても共通の判断を下しうるような、普遍的な分類として定着させることであろう。

<福地創太郎>

<編集> 早期胃癌研究会